

氏 名（本 籍）	伊 藤 朋 子 （兵庫県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博課第252号
学位授与年月日	平成17年 3 月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間文化研究科
論 文 題 目	ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的 構造 ―その成立過程と J.デューイの影響―
論文審査委員	（委員長） 教授 杉 峰 英 憲 助教授 伊 藤 一 也 教授 塚 本 正 明 教授 小田切 毅 一

論文内容の要旨

本研究は、ドルトン・プラン（Dalton Plan）における極めて重要な二つの性格、「人間形成」と「変容性」の観点を踏まえて、ドルトン・プランの原理である「自由」（freedom）と「協同」（cooperation）の融合調和によって成立するドルトン・プランの理論的基盤について研究し、その成立過程とジョン・デューイ（John Dewey）の経験の理論的發展段階との関係性を明らかにしたものである。

論文は、三部構成になっており、第Ⅰ部は、ドルトン・プランの起源とドルトン・スクールの歴史における「自由」と「協同」、第Ⅱ部は、わが国のドルトン・プラン受容における「自由」と「協同」、第Ⅲ部は、ドルトン・プランの成立過程とデューイの思想的展開、と題されている。また、序章として、研究の主題と方法、結章には、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的構造、が加えられている。

まず、序章では、本論文の主題と研究方法が展開されており、第Ⅰ部のドルトン・プランの起源とドルトン・スクールの歴史における「自由」と「協同」では、第一章で、申請者はドルトン・プランの起源について考察している。パーカーストは、エマソンによって、児童を尊重する「自由」の原理の概念を与えられ、デューイによって、民主主義教育の「自由」と「協同」の原理と、この二つの原理がいかにあるべきかを教えられ、スウィフトから「実験室」と心理学的な「個人差」の概念を与えられ、モンテッソーリからは、整備された環境における子どもの自由で自発的な活動を愛と忍耐をもって見守ることを教えられ、パークからは、個別指導についての具体的な示唆を与えられていると考え

られる。申請者は、「自由」と「協同」の概念やその融合調和の理論に基づいて考察を進め、初期のドルトン・プランにおける「自由」と「協同」は、「自由」が中心的で、リバティーの段階であり、「自由」と「協同」の融合レベルは、セルフアクション以前からセルフアクションへの移行のレベルであったことを発見している。

第二章では、ドルトン・スクールの歴史における「自由」と「協同」について考察している。ドルトン・スクールは、創立者のパーカーストとその後継者のダラム (Charlotte Anne Keefe Durham) によって、進歩主義の伝統が形成され、この時代に、ドルトン・プランの理論的基盤ができあがったと考えられる。申請者は、この時代の歴史的背景や実践を探り、ドルトン・スクール存続における「自由」と「協同」について考察している。

第Ⅱ部のわが国のドルトン・プラン受容における「自由」と「協同」では、第三章で、奈良女高師附小におけるドルトン・プランの受容について、池田小菊と木下竹次における「自由」と「協同」に注目して考察している。1921 (大正10) 年1月に、当時の主事木下竹次に招聘されて、奈良女高師附小の教師となった池田小菊 (1892-1976) は、同年4月より、「特別教室」において、ドルトン・プランを実施している。これは、わが国のドルトン・プラン受容の実態が克明に記述されている吉良の『大正自由教育とドルトン・プラン』にはとりあげられていない事実であり、1922 (大正11) 年11月29日にわが国で最初に実施されたとされている成城学園よりも1年半も前のことである。申請者は、その事実確認を行い、ドルトン・プラン実施の背景となった木下竹次の動向を探り、池田小菊の教育思想をパーカーストとの対比において捉えている。さらに、奈良女高師附小のドルトン・プラン受容における「自由」と「協同」について、第六章において帰結された「自由」と「協同」の融合レベルの考え方を基盤に、木下の「学習法」への池田の批判を考察している。

第四章では、大正期のドルトン・プラン受容における「自由」と「協同」について考察し、わが国におけるドルトン・プラン受容に関する研究書を、奈良女高師の木下竹次の影響を確認しつつ精査し、ドルトン・プラン普及の背景や系統を探り、その全体像を明らかにしている。その際、著書の中に見られる吉良の疑問についてもふれ、わが国のドルトン・プラン受容における「自由」と「協同」について、デューイの経験の理論的發展段階に照らして考察している。

第Ⅲ部のドルトン・プランの成立過程とJ.デューイの思想的展開においては、第五章で、ドルトン・プランの成立過程におけるデューイの影響を探っている。ここでは、パーカースト時代におけるドルトン・プランの成立過程を明らかにしているが、その際、デューイから直接に影響を受けたと考えられる時期を、1910年代から1920年代前半までの試行期、1920年代後半の形成期、1930年代の完成期の三期に区分して、それぞれの時期におけるデューイの影響を探っている。

第一節の試行期では、ドルトン・スクールとデューイ・スクールは、実験主義の学校であったこと、個性と社会性の両面を発達させる教育方針をもっていたこと、子どもの発達を三つの時期に分けて段

階的に考え、教師を一つの段階から次の段階への移行の援助者とした点などに共通点があるとしている。そして、ドルトン・プランの試行期において、パーカーストは、デューイの発達の捉え方や知識論の影響を受けていたと結論づけている。

第二節の形成期では、今日のドルトン・プランには「自由」と「協同」の原理を実現するために、ハウス、ラボラトリー、アサインメントの三つの構成要素が存在するが、ハウスの出現は、1920年代後半になってからであり、それによって、ハウス、ラボ（lab）、アサインメントの三本柱が成立し、ドルトン・プランの実践形態が整ったとしている。ドルトン・プランにおける「協同体精神」は、デューイの主張した「相互作用」（interaction）によって生み出される精神であると考えられ、ドルトン・プランのハウス・システムは、その起源をパブリック・スクールのハウスにもち、その後の八年研究などを通しての、パーカーストらの教育的な質の経験を生み出す絶え間ない努力によって、ドルトン独自のものに変容したとする。それは、デューイのいう単純化され純化され組織化された社会生活として、ドルトン・プランの重要な柱となり、子どもの人格形成の母体となったとしている。

第三節の「完成期」では、八年研究によって、ドルトン・プランは人間形成をめざした理論的基盤のあるものとして完成され、ドルトン・スクール独自のカリキュラムが形成され、ハウス、ラボ、アサインメント、社会奉仕活動、会議などが有効に機能するようになり、初期のドルトン・プランは変容したとする。パーカーストらの努力によって、生徒の探究心を駆り立てるような直接経験の機会が多く与えられたのであり、それは、デューイが主張したような教育的な質の経験がなされているような状況であったとしている。そのような状況から協同や奉仕の精神が生まれ、問題解決的な態度が養われるようになったと結している。

第六章では、ドルトン・プランの教育的構造を成立させた「自由」と「協同」の融合調和の理論について、デューイの思想的展開との関連に注目して考察している。ドルトン・プランは、デューイの経験の理論の影響を受けており、その理論の発展に伴ってドルトン・プランも変容してきた。それは、「相互作用」（interaction）から「相関作用」（transaction）へと「経験」の理論が変化していった過程であり、その変化の影響を受けて、ドルトン・プランは洗練され、教育的な質の経験を生み出す、「自由」と「協同」の融合調和の理論が形成されたとしている。そして、ドルトン・プランの成立過程とは、「自由」においては、リバティーからフリーダムへの移行の過程であり、「協同」においては、インタラクションからトランザクションへの移行の過程であるとしている。

結章では、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的構造について、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部における考察の結果を踏まえて論じている。まず、第一節においては、変容性の観点から、ドルトン・プランの教育的構造の歴史的位置を確認し、方法としては、第Ⅰ部、第Ⅱ部において捉えたドルトン・プランの歴史的背景や実践的状况を、第Ⅲ部で帰結された「自由」と「協同」の融合レベルに照らして捉え、変容性の観点から、ドルトン・プランがわが国に受容された大正期の新教育運動

や、ドルトン・プランが生まれた土壌であるアメリカの進歩主義教育運動における「自由」と「協同」の質やその融合レベルについて考察し、教育史の中でのドルトン・プランの位置を確認している。

第二節では、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的構造を人間形成の観点から論じている。ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的な構造は、デューイの経験の理論と相即的な関係にある「場」の理論の展開に伴って成立している。その構造は、有機体と環境とのトランズアクションによる「場」にあるのであり、生長の原理を含む完全な経験、真の経験によって構成され、「自由」と「協同」の融合調和によって均衡が保たれている状態である。そして、この「場」の不均衡と新たな均衡を取り戻すことの連続が探究を生み出すのである。「場」における、科学的な思考を社会的道徳的な問題の解決に役立てる協同的探究は、個人の生長と社会の改善を実現するものであり、八年研究においてパーカーストとそのスタッフらが非常な努力をして実現しようとしたものである。ゆえに、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」は、その融合調和によって教育的な経験の「場」を構成し、その「場」の均衡、不均衡による連続的再生を通して、探究を生み出すものであり、その構造の基礎には、パーカーストが主張した自然のリズムの概念が据えられていたとする。

パーカーストのいう完全な経験、真の経験は、子どもの自然のリズムを尊重する「自由」と「協同」のトランズアクションな教育的構造を基盤として生み出されるものであり、それは、探究を生み出し人格を形成するものである。申請者は、このようなドルトン・プランの教育的構造を、人間形成の観点から、デューイのコミュニケーション論の影響に注目して考察している。

ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の融合調和を促進させる機能をもつもの、つまり、教育的な「経験の場」を構成し、その「場」の均衡、不均衡による連続的再生を促し探究を生み出すものこそが、コミュニケーションであり、その最高のコミュニケーションが芸術である。デューイのコミュニケーション論は、『民主主義と教育』、『経験と自然』、『経験としての芸術』において展開されており、それぞれの著書の出版は、ドルトン・プランの「試行期」、「形成期」、「完成期」と重なり、ドルトン・スクールの実践において、会議、ハウス、社会奉仕活動、劇などが取り入れられ、次第に芸術をはじめとするコミュニケーションの重視がなされていく過程と連動している。

コミュニケーションの最高の形であるデューイの芸術論の独自性は、「自由」の側面だけでなく、「協同」の側面においても、その人間形成的意義を主張しているところであり、パーカーストと同様、その主張の基礎に、「自然のリズム」の概念が据えられている。人間形成の観点において、パーカーストの「自由」と「協同」のトランズアクションな教育的構造は、共通の経験を創造する過程であるコミュニケーションの文脈の中での、美的で洗練された真の経験を通して成立し、探究を生み出し、人格を形成するものである。申請者は、コミュニケーションの中でも、「自由」と「協同」の融合調和を最も促進する機能をもつものが、デューイの主張する経験としての芸術であり、それは「自由」的には、自然のリズムの表現を、「協同」的には、共感を内包するものであり、人間形成を促すもの

であると帰結している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的に展開された進歩主義教育運動において先導的な教育実践を組織的に形成したドルトン・スクールの教育原理である「自由」と「協同」について、「人間形成」と「変容性」の観点を踏まえて歴史的に研究し、プランの成立過程とジョン・デューイの経験の理論の発展段階との関係性を明らかにしたものである。

「人間形成」と「変容性」の観点は、申請者がドルトン・プランの発案者でありドルトン・スクールの創設者であるヘレン・パーカーの教育思想と、彼女に理論的な影響を与えたジョン・デューイの理論を比較検討し、論理的な整合性を精査する過程で出現した多様な原理的性格の中から発見したものであり、この二つの原理の関係についての考察がないままに進められた先行研究や教育実践においては、「自由」と「共同」の融合的調和の考え方がいかにも脆弱であった。従って、これまで、ドルトン・プランは、発展途上の未完成なものとされ、特に、日本でのプランの受容に際しては、「協同」よりも「自由」に重心を置く単なる方法論として、理論的には矛盾を内包する不完全な教育論という評価がなされてきた。申請者が、「自由」と「協同」の融合的調和を「人間形成」と「変容性」の観点から整合的に体系化したことは、ドルトン・プランの研究のみならず、進歩主義教育運動の根幹に位置づく一つの新たな実践形態を解明したという点で高く評価できる。さらに、デューイ研究においても、申請者はデューイが自身の経験論を構築していく過程で出現した課題を3つのステージに類型化し、その各々の具体的な実践形態を歴史的に解明したという点でも、デューイ研究に新たな地平を開いていると評価できる。

ドルトン・プランの成立過程に関しては、これまでの研究では、パーカーの著書『ドルトン・プランによる教育』（1922）が出版された時期にドルトン・プランが成立したととらえ、それ以前を成立過程とみなしてきたのであるが、本研究では、デューイとの関係で、1930年代の「八年研究」を経て、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的構造が完成されたことを論証し、1910年代から1930年代までを成立過程と位置づけ、1910年代から1920年代前半までを「試行期」、1920年代後半を「形成期」、1930年代を「完成期」の三期に新たに区分して、ドルトン・プランにおける理論的基盤の成立過程を総合的に解明している。

本論文は、三部六章構成となっているが、第Ⅰ部と第Ⅱ部において、歴史的な視点からドルトン・プランを把握し、初期のドルトン・プランにおける「自由」と「協同」、進歩主義教育運動を背景としたドルトン・プランの「自由」と「協同」、大正期においてわが国に受容されたドルトン・プランの「自由」と「協同」について、その融合レベルを基軸として、諸概念の確認を行っている。「自由」

と「協同」の融合レベルは、最終的には第六章において帰結されることになるが、ドルトン・プランの「試行期」は、「自由」と「協同」の原理はそれぞれ別々に独立して実践されておりわが国に受容されたのはこの時期であった。

このレベルではハウス (House)、ラボラトリー (Laboratory)、アサインメント (Assignment) という、ドルトン・プランの実践における三つの構成要素のうち、ハウスが位置づいておらず、ドルトン・プランは「自由」の原理が中心の個別指導案と捉えられていたのである。「形成期」にはハウス、ラボ、アサインメントが確立し、二つの原理は実践の中で同時に実現されようとしていた。そして「完成期」の八年研究への取り組みによって「自由」と「協同」の融合調和がなされている。そして、デューイの経験の理論の発展段階は、セルフアクション、インタラクション、トランズアクションの各段階を経ているが、このデューイの経験の理論の発展に連動して、ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の融合調和による経験の質が教育的なものへと変容していることを解明している。

一般に、デューイのトランズアクションの理論は当時の現象学の強い影響を受けていることは明白なことではあるが、デューイ自身が1880年代から構想していた主・客未分離の問題や身・心の反射弧の理論に内在する問題をデューイ自身がいかに顕在化して解明していたのかという研究に関しては未だ統一の見解には至っていない。申請者は、当時のデューイの経験論の解釈のこの限界を認識した上で、パーカストの「自由」と「協同」の融合調和の考え方を展開しているのではあるが、プランが日本に受容されるに際しては、日本的な意味での心身一如的な考え方や広く哲学の世界に浸透していた現象学的な理論をも射程距離に入れる必要がある。しかし、これらの問題はドルトン・プランの側からデューイを見るという基本的な申請者の研究スタンスから、デューイ自身が自己の経験論に対していかなる対処をしていたのかという点を解明することができるという意味で、本論文の価値を損なうものでは決してない。むしろ、第Ⅱ部において展開された、ドルトン・プランの日本受容に関しこれまで見過ごされてきた最初の実践を取り上げ、プランの実践者とその理論家との間の葛藤を描ききることで、さらなるパーカストとデューイの関係を解明する上で有効なヒントを提案しているものと考えられる。

第Ⅲ部では、パーカストのドルトン・スクールとデューイ・スクールを実践的側面から比較考察し、両者の共通点と差異点から、ドルトン・プランへのデューイの影響を考察している。また、ドルトン・プランの成立過程の研究から「自由」と「協同」の教育的構造を導出しており、教育史の中にドルトン・プランを位置づけている。パーカストのいう完全な経験、真の経験は、子どもの自然のリズムを尊重する「自由」と「協同」のトランズアクション的な教育的構造を基盤として生み出されるものであり、それは、探究を生み出し人格を形成するものである。申請者は、このようなドルトン・プランの教育的構造を、人間形成の観点から、デューイのコミュニケーション論の影響に注目して考察している。この観点は、進歩主義教育運動の出発点において芸術教育論として展開されたものの理

論化に係る問題であり、デューイの影響を検討することによって理論的に位置づけられるものである。

以上の理由から、本審査委員会は、本申請論文が奈良女子大学博士（文学）を授与されるに十分な内容を備えているものと判断する。